



ア  
メ  
リ  
カ  
童  
話  
か  
ら  
1

松 原 至 大

1 象のアルフレッドちゃん

晴れた六月の、ある日のことでした。小鳥たちが、楽しそうに歌っていました。小川の水が、よく澄んでいました。象のアルフレッドちゃんは、赤い水泳着を着ました。泳ぎに行こうとするのです。お魚も一びき、二ひきは、つかめるかもしれないと思いました。

けれども、アルフレッドちゃんのお母さんは、ちがつたプランをお持ちでした。

「わたしは、アダムちゃんを、お散歩に連れて行きますよ。」と、お母さんがおつしやいました。そしてよ、そ行きの帽子をおかぶりになると、こうおいつけになりました。「あなたはお家について、食器をあらつて下さいよ。」

やがてお母さんは、お鼻にパウダをおつけになると、赤ちゃんのアダムちゃんを乳母車うほぐるまにのせて、お顔についたチヨコレート・ミルクをきれいにふいてから、雨は降らないかと、お空を見上げて、それからおでかけになりました。

アルフレッドちゃんは、お家について、働くのがいやでした。ひたいに八の字をよせて、いいました。

「ああ、いやなこつた。」

アルフレッドちゃんは、あんまり八の字をよせたので、お顔がくたびれてしまいました。やつとのことで、食器あらいにとりかかりました。あらうのはいやでしたから、ひとまとめにして、それをみんな積み上げました。それからもう、しまうのです。大きなお皿と、カップと、臺皿をしまいました。お次ぎはお母さんが大切になさっているポールです。ところが、手がせつけんたらけだつたので、ボールがすべりました。床の上に落ちて、ものすごい音をたてて、こわれました。

「やあ。」アルフレッドちゃんは大きな聲をだしました。「お母さんが、なんとおつしやるだろう？」ところがその

次ぎに出た言葉は、「多分、ほく、なおせるよ。」でありました。

アルフレッドちゃん、深いお皿を出して、はちみつを入れました。その中に少しの糖みつと、ピーナツト・バターと、レモン・ジュースと、せきどめシロツブと、コーンスターチとを入れました。かきまわしていると間もなく、とてもべとべとしました。まぜ物ができました。

アルフレッドちゃんは、ボールのかげらを拾い集めて、そのまぜ物でつなぎ合せました。できあがると、太陽にあててほしました。たちまちそのボールは、新しいものようになりました。

そのうちに、アルフレッドちゃんのお母さんがお歸りになりました。

「あのねえ。」と、お母さんはため息をついておいでです。「あのねえ、下町は大へんでしたよ。今朝、王さまがねえ、お冠をお落しになつて、こわしてしまつたのですよ。ところが、だれもそれをなおして上げるものがいまません。王さまは、とてもお困りですよ。」

こうおつしやつて、お母さんはアダムちゃんを、高いすの中にお入れになると、アルフレッドちゃんにむかつて、「どうしてそんなに沈んでいなさるの？」とおたずねになりました。

「ほくしよげているんです。」アルフレッドちゃんは、泣きながら答えました。「ほく、食器をあらつてゐる時、お母さんの大切なボールをこわしてしまいました。」

「どうして。われてはいないようよ。」と、お母さんが大きな聲でおつしやいました。

「ほく、それをつけたんです。とてもべとべとしました。まぜ物を作つて。」アルフレッドちゃんが答えました。

「よかつたわ。よかつたわ。」お母さんはお鼻を高くしておつしやいました。「あなたは、とてもえらい象の子ですよ。」その時、またお母さんが、突然におつしやいました。「ああ、そうよ。わたしたち、お城へうかがつて、王さまにお眼にかかりましょう。あなた、多分お、冠をなおせてよ。」

そこで二人は、窓をしめて、アダムちゃんと、べとべとしました。まぜ物を持つて、ほこりの雲の中をでかけました。

お城では十分もかからない中に、王さまのお冠がなりました。王さまは大へんなお喜びになつて、金のメダルをアルフレッドちゃん、胸につけて下さいました。ほかの象たちは、「えらい子供だな」といつて、ほめました。でも、アルフレッドちゃんはおとなしく笑つてばかりいました。(アン・パターソン女史の作による)